

報 告

日本義肢装具士協会学術大会

国立障害者リハビリテーションセンター学院
義肢装具学科 丸山 貴之

1. はじめに

平成 23 年 6 月 18 ~ 19 日に、大阪において(有)大阪義肢の石原栄治大会長のもと第 18 回日本義肢装具士協会学術大会が開催された。大会のテーマは「義肢装具と新たな潮流」という、義肢装具業界にとって大きな課題として挙げられる技術の革新や、領域の拡大といった時流に沿ったテーマであった。

また、今回会場となった大阪市中央公会堂は、国指定重要文化財であり、特別講演をされた千里リハビリテーション病院の吉尾雅春先生が冒頭に、「一度ここで講演をしてみたかった」とおっしゃられたほどで、参加者としても、会場の壮麗さと歴史の流れを感じさせる雰囲気に身の引き締まる思いであった(写真 1)。

2. 内容

会場は、大集会室の第 1 会場と、第 2 ~ 4 会場および商業展示場の 5箇所で行われた。各会場とも重厚な装飾が施され、これまでとは雰囲気を異にする大会となった。第 1 会場では、講演が中心となり、特別講演と招待講演が各 2 題、教育講演などが行われた(写真 2)。それぞれに、大会テーマの「新たな潮流」を象徴する、義肢装具に関する新たな試みや、既成概念にとらわれない考え方に基づく内容で、参加者はみな熱心に聴講していた。

さて、今大会に掲げられた「新たな潮流」の一つとして、まず脳卒中のリハビリテーションに対する装具療法の考え方の変化が挙げられる。これは脳卒中治療のガイドライン 2009 の下肢装具装具療法の評価にもその変化が現れているところである。



写真 1 会場となった大阪市中央公会堂



写真 2 壮麗な大集会室での特別講演

冒頭の吉尾先生の特別講演 I「脳卒中患者に対する装具療法と理論的背景」では、運動療法と装具療法の新しい考え方を示されていた。早期からの長下肢装具を用いた立位訓練により股関節の安定に着目して歩行の改善を図る治療として長下肢装具を積極的に使用していくという、先生が実践され成果を上げられている手法は、我々の既成概念を覆す、まさに新たな潮流であり、新たな装具の可能性を示すものであった。

また、和歌山県立医科大学の田島文博先生による

教育講演「脳血管障害リハビリテーションにおける装具療法の絶大なる効果」でも、これまでの脳血管障害のリハビリテーションで考えられてきた画一的な回復プロセスに捉われず、病態を画像診断により確に把握し、原疾患と症状・回復プロセスの関連をより系統的に考慮し適切な手法を選択することで、装具療法がより効果的となるという事実が、実例とともに分かりやすく解説された。

脳卒中の上肢装具療法としては、香港理工大学の Man Sang Wong 先生の「脳卒中患者を対象とした上肢リハビリテーションのための機能的電気刺激の応用」で、これまで明確でなかった脳卒中患者に対する FES の効果が明確に示された。

これら三つの講演のテーマとなった脳卒中は我々義肢装具士が接する代表的な疾患であり、これまでの概念を刷新する内容に、皆、熱心に聞き入っていた。

また、もう一つの「新たな潮流」として示されたのが技術革新である。

特別講演 II で筑波大学大学院の山海嘉之先生が講演された「サイバニクスを駆使した HAL / サイバニックレッギング最前線」では、今や説明も不要と思われる HAL の臨床での成功例がいくつか紹介された。中でも特筆すべきは、ポリオなどの運動神経麻痺患者に対しても、ごく僅かに発生する筋電信号を検知し制御信号とすることで、歩行が可能となった事例である。これは HAL のような機器の対象外と思われていた症例にも適応が広がり、その技術の可能性の大きさを示すものであった。また、この HAL の制御システムを応用した大腿義足バイオニックニーも紹介された。これは筋電を制御信号として、これまでの膝継手では不可能であった膝の屈伸の随意的な制御を可能としたものであった。未だ開発途上とのことであったが、これは義足使用者の生活を大きく変える画期的な技術であり、今後の動向が注目される。

そして、招待講演 I の米国 Orthocare Innovations 代表の David Boone 氏による「身体機能回復の将来予想：これから 10 年に起こる研究・開発」では、義肢装具の製作・適合における技術の大きな転換の必要性が示されていた。例えば、義足アライメントの状態を簡便に可視化する装置など、現状の主観的評価のみに頼っている状態から、定量的なデータに基づく評価による、ユーザーにより適合した義肢装具の提



写真 3 重厚な装飾が施された商業展示会場

供の重要性を、氏の開発した機器の有効性の実例をもって提唱され、今後、我々義肢装具士のパラダイムの転換が求められることを示された。

これらの技術革新は、ともすると経験や感覚に頼りがちな我々義肢装具士も、新しい技術に適応していくことが求められることを示していた。

これらの講演と同様に、一般演題では義肢、装具を中心に、関係領域の開発や改良、義肢装具の周辺領域に関するものなど多岐にわたる演題が出され、それぞれに活発な議論がなされた。

また、商業展示でも「新しい潮流」を感じさせる新製品が様々に紹介されていた（写真 3）。

そして、最後に市民公開講座として、大阪大学の木下タロウ先生による「緒方洪庵と適塾」では、幕末に既存の古い概念と闘い、日本の医療の近代化の礎を築いた緒方洪庵の業績が興味深く紹介され、温故知新の姿勢を新たにした。

3. おわりに

今回の学術大会では「義肢装具と新たな潮流」というテーマのとおり、既成概念に捉われない考え方や技術が紹介され、義肢装具の将来像が示唆されたと思われる。そして我々義肢装具士を含めリハビリテーションに関わる者皆が、同じ場所にとどまらず常に新しい技術を吸収していくことの必要性が示された。

またそれには、あわせて最新の知識を獲得していく努力を怠らず精進することの重要性も改めて感じた次第である。特に義肢装具士の教育に携わる者として、その姿勢の大切さを再認識することとなった学術大会であった。